

# 令和5年度病害虫発生予察注意報第6号

令和5年8月1日  
愛知県

作物名：水稻

病害虫名：斑点米カメムシ類

1 発生地域 県内全域

2 発生程度 やや多い

3 注意報発表の根拠

- (1) 7月下旬の巡回調査における本田のすくい取り調査（47地点94ほ場）において、斑点米カメムシ類の捕獲数が平均3.84頭（平年2.34頭、前年4.60頭）と、過去10年間で2番目に多かった（表1）。また、種ごとの捕獲数は、斑点米産出能力の高い大型のカメムシ（クモヘリカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）が、いずれもやや多いから多い状況であった。
- (2) 7月下旬の巡回調査における畦畔雑草のすくい取り調査（47地点92ほ場）において、斑点米カメムシ類の捕獲数が平均7.09頭（平年5.45頭、前年5.45頭）と、過去10年間で3番目に多かった（表2）。また、種ごとの捕獲数は、カスミカメ類及び大型のカメムシが、いずれもやや多かった。
- (3) 7月27日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の気温は高く、本虫の発生に好適な条件が続くと見込まれる。

表1 斑点米カメムシ類の7月下旬本田すくい取り調査結果（1ほ場あたりの平均捕獲虫数）

種類	発生量	本年	平年
ホソハリカメムシ	やや多	0.44	0.34
クモヘリカメムシ	多	0.77	0.26
シラホシカメムシ類	並	0.01	0.05
イネカメムシ	やや多	1.36	0.24
カスミカメ類	並	1.11	1.33
ホソナガカメムシ類	並	0.03	0.05
ミナミアオカメムシ	やや多	0.13	0.07
合計	やや多	3.84	2.34

（平年：平成25年～令和4年の平均値）

表2 斑点米カメムシ類の7月下旬畦畔すくい取り調査結果（1ほ場あたりの平均捕獲虫数）

種類	発生量	本年	平年
ホソハリカメムシ	並	0.28	0.35
クモヘリカメムシ	やや多	0.41	0.23
シラホシカメムシ類	やや少	0.05	0.13
イネカメムシ	やや多	0.07	0.03
カスミカメ類	やや多	6.21	4.58
ホソナガカメムシ類	少	0.01	0.10
ミナミアオカメムシ	やや多	0.05	0.04
合計	やや多	7.09	5.45

（平年：平成25年～令和4年の平均値）

#### 4 防除上注意すべき事項

- (1) 表3を参考に出穂期前後から穂揃期に薬剤防除を実施する。その後も発生が多い場合は、7～10日後に再度防除を行う。薬剤によって散布適期が異なるので注意する。なお、イネカメムシに対する防除は、その他の斑点米カメムシ類と比べて加害する時期が早いため、出穂期に効果が表れるように薬剤防除する。
- (2) 周辺の水田よりも出穂が早いほ場では、斑点米カメムシ類が集中して飛来することがあるので特に注意する。また、前年にイネカメムシによる不稔粒が発生したほ場では、出穂前からほ場での発生状況に注意する。
- (3) 水田内で穂をつけたヒエ類及びイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の発生を助長するので除去する。
- (4) 斑点米カメムシ類は水田周辺のイネ科雑草などで増殖するため、雑草の除去を徹底する。ただし、出穂間際または出穂後の除草は斑点米カメムシ類を水田に追い込むことになるので控える。やむを得ず除草を行う場合は、必ず薬剤防除を併せて実施する。

表3 斑点米カメムシ類に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
トレボンEW	収穫14日前まで	3回以内	3A
キラップフロアブル キラップ粒剤	収穫14日前まで	2回以内	2B
スタークル／アルバリン顆粒水溶剤 スタークル液剤10 スタークル／アルバリン粒剤 スタークル豆つぶ	収穫7日前まで	3回以内	4A
エクシードフロアブル エクシード粉剤DL	収穫7日前まで	3回以内	4C

キラップ粒剤の散布適期は、出穂10日前から出穂期までなので注意する。

成分ごとの総使用回数に注意する。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、[https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism\\_irac03.pdf](https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf)を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

#### 5 連絡先

愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病虫害防除室

電話 0561-62-0085 (内線471)